

寄生虫検査

動 向

ぎょう虫卵検査の対象学年は、平成7年度の学校保健法改正後、県下一部の地域を除き、小学校1年生から3年生まで実施されている。

13年度の受検学校数は1,363校、受検者数は296,121人で、前年度に比べて学校数では281校（17.1%）、受検者数では49,181人（14.3%）減少した。湯河原町が新たに検査を実施した一方、川崎市、藤沢市が他機関で検査をすることになった。保卵者の割合は年々減少し、平成13年度は0.7%となった。同様に寄生虫ゼロの学校の割合は全体の53.04%に達し、ぎょう虫検査の本来の目的を達成しつつある。ぎょう虫の陽性率を減少させる効果の高い4日法実施の市町村は愛川町、津久井町の2町であった。検査成績の集計については混合名簿が主流を占め、従来からの男女別集計から一括集計になりつつある。当協会検査部はぎょう虫卵検査に限らず、学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するのではなくて、学校現場の要望に答え、行政、医師会等との連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢の整備をさらに進めていく。

方 法

ぎょう虫検査

当施設ではウスイ式セロハンテープをもちいた二日連続採卵法で検査を行っている。ぎょう虫は産卵時期になるとおもに夜間肛門から這いだし、肛門の周りに卵を産む。このため糞便中には卵は見つからない。検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに、検査紙のウスイ式セロハンテープを肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲がふき取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。当協会では検出感をあげるため1度顕微鏡検査を行ったものをもう一度再チェックして見落としを最小限にしている。

精度管理

1日一万件以上検査する場合は、毎日の陽性率はおおむね一定の傾向を示す。ぎょう虫検査の精度管理は日々の陽性率をチェックすることにより実施している。

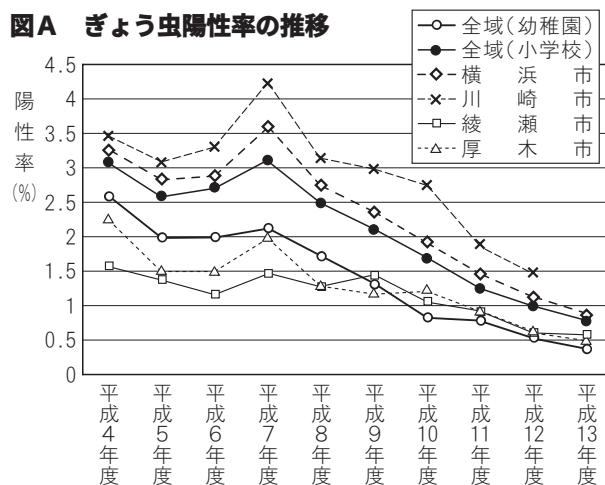
顕微鏡検査による見落としを防ぐため一度検査したものを再検査し見落としがないかチェックしている。

結 果

精度管理の結果としては、シーズンを通して毎日の陽性率はほぼ一定の値を示していた。また、見落としを防ぐための再検査結果は良好であった。過去10年間のぎょう虫陽性率年次推移を図に示した。幼稚園児の陽性率を（○）で、当施設で実施している全小学生の

陽性率を（●）で示した。また年1回法で検査を実施してきた主要都市横浜（◇）、川崎市（×）及び7年度まで年2回法を実施してきた綾瀬市（□）、厚木市（△）の陽性率年次推移（小学校）をそれぞれ示した。平成7年度に陽性率が大きく上昇したのは法改正により検査の対象学年が小学校の全学年から陽性率の高い小学3年生までとなったためである。グラフから平成7年度を境にほぼ一定の割合で陽性率が減少してきているのがわかる。小学校全体でみると平成11年度から平成13年度にかけてはその傾向がわずかに鈍化してきているが減少傾向に変わりはない。横浜市では平成12年度の1.14%から13年度0.89%と0.25%減少した。川崎市は平成13年度は他機関で検査を行ったため統計はとれていない。他方、早くから年2回法を実施してきた綾瀬市では平成12年度の0.59%から平成13年度は0.57%とほぼ横ばいであった。同じく年2回法を実施していた厚木市は平成12年度0.62%から平成13年度0.49%で0.13%減少した。小学校全体で見たとき、平成7年度の陽性率3.1%が平成13年度に0.81%と6年間に3%も減少したことになる。また平成13年度は幼稚園の陽性率も0.39%まで減少してきた。幼稚園は平成7年度の2.1%から平成13年度0.39%へと五分の一に減少したことになる。全体的に陽性率の減少傾向は13年度も続いている。平成7年度からの一様なぎょう虫陽性率の減少傾向がこのまま続いて行きぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、あるいはあるところで減少傾向がとまるのか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。いずれにしろ確実にぎょう虫症が減少してきたことは明白であり、長年実施してきたぎょう虫検査の効果が認められるところである。

図A りょう虫陽性率の推移



関係の集計表は202～203頁に掲載